

18 一八八六年におけるリンダ・リチャーズの上海から京都への足跡

岡山寧子¹⁾・依田和美²⁾

¹⁾京都府立医科大学医学部看護学科

²⁾元大阪府立看護大学医療技術短期大学

一八八六年一月二一日、京都看病婦学校で看護教育を開始するために来日したリンダ・リチャーズ (M.A.J.Richards) は、二四日に横浜から神戸に到着し、そこで一週間滞在する。目的地京都には学校予定地の見学に向いたのみで、旅装を解く暇もなく京都のデーンビス夫人 (S.D.Davis) の静養に付き添うために、同月二九日神戸から上海に向けて出発した。

リチャーズの横浜到着から上海へ至るまでの足跡については、昨年の本学会で報告した。今回は、彼女が上海から戻ってから本務地京都に至るまでの足跡とその間の日本体験を探りたい。史料は、アメリカカンボード宣教師文書リチャーズ書簡(七月三〇日、以下、リ

チャーズ書簡)、ベリー (J.C.Berry) 書簡、リチャーズの回想記(以下、回想記)、The Hyogo News (以下、H・N・)、山陽新報などを用いた。

〔上海から神戸へ〕

H・N・によると、リチャーズが上海から神戸に戻るの二ヶ月余り後の四月四日である。上海滞在中の詳細は不明であるが三月二〇日のベリー書簡では、デーンビス夫人の回復がはかばかしくないため、神戸経由でアメリカに帰国させることとなり、上海から日本への帰国にリチャーズを助けるためタルコット (E.Talcott) を上海に派遣すると述べている。タルコット女史は神戸女学院の創始者で、岡山での伝道活動を通してベリーとは旧知の間柄であった。リチャーズは神戸までデーンビス夫人に付き添い、神戸に留まる。一方デーンビス夫人は、六日の夕方他の宣教師らに付き添われ横浜に向けて出発する。しかし不幸なことに彼女は四月七日の夕に船上から投身自殺した。この様子は四月九日付の Japan Daily Gazette に掲載されているが、リチャーズ書簡や回想記にはその記述はみられない

い。しかし書簡中に「…上海からの帰国直後はあまりに疲れすぎて、一々二週間は何も活動できず…」と述べており、慣れない上海での生活やデーン夫人の世話、そして夫人の死に直面して、リチャーズが心身共に疲労困憊している様子がうかがわれる。

〔神戸から岡山へ〕

リチャーズ書簡によると、神戸での休養後四月中旬頃に日本語の勉強のためにタルコットと共に岡山に行く。岡山では、備前上道郡門田村字偕楽園のギューリック (O.H. Gulick) 宅に滞在し、姫路や高梁にも足をのばしている。タルコットは地元住民と共に精力的に活動していると記している。また、回想記に岡山滞在中コレラが発生し、リチャーズ達は六週間隔離され、彼女は直ちにコレラ病院で働く旨を行政に申し出たが、丁重に断られた。しかしその申し出が美談として地元新聞で紹介されたと述べている。リチャーズ書簡ではコレラには触れず、岡山での生活はとても楽しかったとする反面、「自分は役に立っていないと感じる」と述べ、来日目的であった看護の教育や実践にまだ携

わることが出来ていないことへのいらだちをみせている。

〔岡山から京都へ〕

約三ヶ月間の岡山滞在の後、七月二四日に避暑のために比叡山に着いたとリチャーズ書簡で述べている。八月二六日のベリー書簡によると、比叡山でのリチャーズの様子を、それまでほとんど岡山で過ごし、日本語も上達し、新しい仕事の準備に入っていると記している。また、二週間後には京都に戻り、旧デーン邸を仮施設として診療を開始すること、五々六人の患者のケアのためには看護助手が必要なこと、土地購入や病院運営のための資金調達などの記述があり、この避暑期間にリチャーズはベリーと共に京都での病院と看護婦学校の開設準備を精力的に始めている様子がみられる。京都の住まいとなる旧デーン邸の一角に落ち着くのは、比叡山で約一ヶ月半過ごした後の九月初旬頃と考えられる。この仮施設で同志社病院と京都看護婦学校の活動がスタートする。